事例4

住民みんなで作り上げる地域交流の場

ゆいまーる共生事業・喜名福寿会（読谷村喜名）

読谷村は本島中西部に位置する人口およそ３万８千人の村で、住民相互の結びつきが強く、村全体として地域活動が盛んな地域である。

同村を縦断する国道 58 号線の沿線に広がる喜名地区では、住民のボランティアが運営するミニデイサービス（ゆいまーる共生事業）が行われ、地域交流の場として福祉の向上に一役かっている。

大勢の住民ボランティアが役割を分担して運営

▲手作りのおやつに舌鼓を打つ利用者。

読谷村喜名地区の公民館では毎月第２・第４水曜日の午後２時から４時の時間帯に、地域の高齢者を対象としたミニデイサービスが開催されている。このミニデイサービスを運営するのは、地域のボランティアグループ「喜名福寿会」（宇根清子会長）のメンバーの皆さんである。

喜名福寿会の最大の特徴は、地域住民がボランティアとして多く関わっている点である。毎月２回のミニデイサービス（定例会）には利用対象者約 35 名（登録は約 50 名）に対し、ボランティアも約 36 名が参加している。これら大勢のボランティアが、皆それぞれに役割分担をし、手分けしながら準備を行っている。

まず、定例会前日の役員会で、プログラムやおやつのメニューの検討を行う。そして、定例会当日になると、午前中からボランティアが公民館に集い、会場設営やおやつの調理、レクリエーションの用意などを行っている。会場は利用者がリラックスして過ごせるよう至るところに細かい気配りが施され、明るい雰囲気を作り上げている。

取材に訪れた日は、開始前に健康チェック（血圧測定）が行われ、健康体操、地域の小学校との交流、レクリエーション、おやつを食べながらの歓談、誕生会などが行われた。

喜名福寿会のメンバーの年齢層は幅広く、利用対象者と同年代のボランティアも多い。地域に住む住民同士が公民館を拠点に交流し、一緒に楽しい時間を過ごしている。

また、定例会のほかにも年間を通じて屋外活動なども実施され、活動内容も充実している。

公民館を活用したミニデイの草分け　県内各地に波及

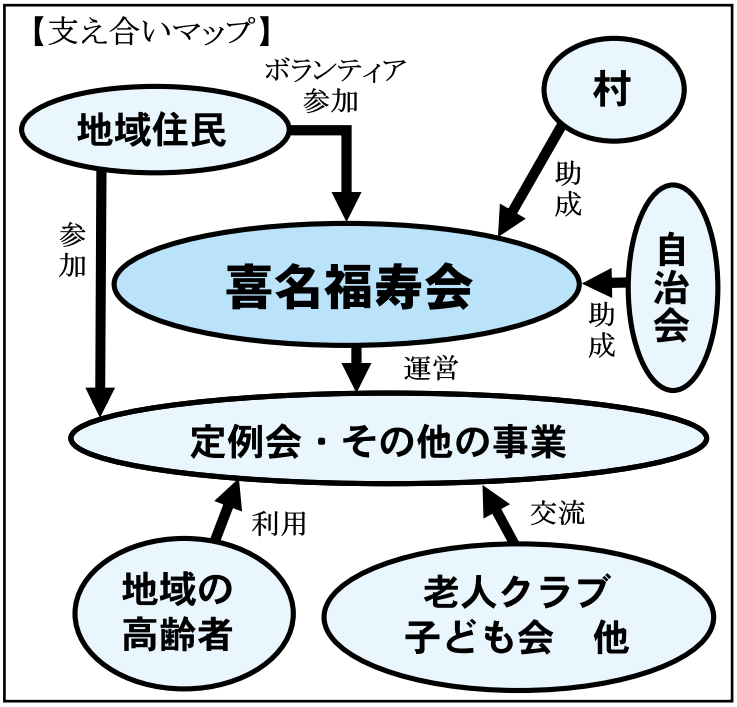
活動のスタートは、平成元年にまでさかのぼる。当時の村社協事務局長の呼びかけで、地域の民生委員らが「水曜会」を結成し、毎週水曜日に地域の高齢者を招いてのレクリエーションを中心とした活動を始めたのが最初である。

平成２年には「喜名福寿会」に改称し、役員体制などを確立。徐々に参加者も増え、月２回の開催となった。やがて自治会の協力を得て、公民館で手作りのおやつを調理・提供するなど、活動内容も充実していった。現在ではすっかり地域に定着した活動となり、住民は開催日をいつも心待ちにしているとのことである。

こうした喜名地区の取り組みをモデルに、公民館を活用したミニデイサービスが村内各地に広がっていった。現在では読谷村の「ゆいまーる共生事業」として全23字で開催されている。公民館型のミニデイサービスはやがて県内各地にも波及していくなど、まさに草分け的な取り組みであった。

地域ぐるみで活動をバックアップ　世代間交流も活発に

喜名地区は、昔から住民相互の結びつきが強く、地域活動が盛んであった。自治会には年代別に子ども会、青年会、婦人会、成人会、協友会、老人クラブといった団体が結成され、それぞれが活発な活動している。喜名福寿会もこれらの団体の一つとして自治会から認められ活動を行っている。公民館施設の使用や活動資金の助成など自治会のバックアップは大きな支えとなっている。



ボランティアを含めると子どもからお年寄りまでさまざまな年代の住民が関わっている喜名福寿会では、保育園や小学校、子ども会、老人クラブなどとも積極的に交流を行っている。取材に訪れた日は地元の小学生が高齢者の前で三線を披露して場を盛り上げていた。

学校や行政を含め、地域ぐるみで活動を支えていることが喜名福寿会の強みとなっている。

いくつになっても現役のボランティア

喜名福寿会の松田千代子副会長は「ボランティアを始めて 10 年になるが、辞めようという気に全くなりません。この活動には何かひきつけて離さない魅力があります。」と話す。

▲ボランティアも利用者と一緒になって場を楽しむ。いくつになっても現役のボランティア。

定例会の運営にボランティアとして関わっている知念政仁さん（86 歳）は、「自分と同い年の対象者もいるが、私は会場準備の手伝いをしています。皆さん手分けしながらだから、大変じゃない。」と語る。年齢を感じさせない力強い言葉からは大きなやりがいを感じている様子が伝わってくる。こうして、いくつになっても現役のボランティアでいることが、生きがいづくり、健康づくりにもつながっている。

男性の参加者を増やし、利用者の裾野の拡大を

活動上の課題点について宇根会長に話をうかがうと「男性の参加者が少ないこと」を第一に指摘した。女性の参加者が増える一方で、参加の案内や呼びかけを行っているものの、男性の参加者がなかなか集まらない現状がある。役員会では、男性の参加者に役割を与えて、会の運営に関わっていることを実感してもらうなどして参加を喚起し、利用者の裾野を広げていきたいと考えている。

脈々と受け継がれる「支え合いの心」

喜名福寿会が平成元年から 20 年近く活動を継続できているのは、地域ぐるみで取り組んできたからに他ならない。そして、これからも「みんなで支え合う」というスタンスに変わりはない。

宇根会長は「『いつかは自分もお世話になるときが来るから』って冗談で言うけども、本心はいつまでも元気でボランティアを続けていきたい。」と語る。その言葉からは、支える側、支えられる側という垣根を越えてみんなで作り上げようという気概が伝わってくる。

今後も、喜名福寿会の活動が地域から必要とされている限り、「支え合いの心」は次の年代へと脈々と受け継がれていくものと思われる。

事例5

足元から築く、地域の見守り体制

「一人暮らし高齢者マップ」作成・城前自治会（沖縄市城前町）

沖縄市城前町はコザ十字路の一角を占め、戦後まもなく多くの転居者がこの土地で商売を始め、コザの中心部のマチグヮーを形成していった地域である。

この地域で、自治会（内間満自治会長）を中心に高齢者マップの作成などによって地域のつながりを再構築する活動が進められている。

住民自らの足で作成した「一人暮らし高齢者マップ」

沖縄市城前町では、自治会を中心に地域の高齢者等の見守り体制の再構築および強化に向けた活動を展開している。

その足がかりとして行ったのが、「一人暮らし高齢者マップ」の作成である。

まず、地区のエリアを11ある班ごとに分割。次に、ゼンリンが発行する住宅地図を用いて、各班のエリア内にある一人暮らし高齢者宅や見守りが必要な障害者宅をマーカーでしるしをつけ、その人数や居住地を把握するというのがその試みである。

▲公民館の連絡先が記載されたチラシを作成・配布した。写真は内間満自治会長。

特筆すべきはその実態把握の過程にある。現在、個人情報保護の観点から市役所などの行政機関から地域の高齢者の氏名・住所などを入手することはできない。そこで、城前自治会では、住宅1件1件を巡回し、住民の実態把握に当たった。

巡回に際しては自治会内に組織される「福祉連絡協議会」を活用した。11の班ごとに任命されている福祉委員や自治会役員を中心に、担当エリア内をくまなく訪問し、見守りが必要な住民に対しては健康状況や家族構成などの聞き取りを行った。

こうして完成した地区全体の「高齢者マップ」をもとに、一人暮らし高齢者等への見守りや安否確認を行い、月1回開催される福祉連絡協議会において各委員や自治会役員が情報交換を行っている。

また、自治会では自治会長の携帯電話や事務所の電話番号が記載された緊急連絡用のチラシを作成した。このチラシを各家庭の電話機付近に貼るように依頼し、困ったときはすぐに連絡するよう訴えて回った。

相次いだ「孤独死」報道　細やかな見守りの必要性を痛感

平成 17 年 10 月から 11 月にかけて、城前町を中心に 3 件の「孤独死」が発生した。1 件は地域との関係をほとんど持たない方が死後 8 ヶ月近く経過して発見されたケース。残りの 2 件は地域とのつながりがあるにもかかわらず 2 ～ 5 日後に遺体が発見されたケースである。マスコミはこれら 3 件を「孤独死」と報道し、県内外に衝撃を与えた。同地区の内間自治会長はこの時、「孤独死」という言葉の定義に疑問を持つと同時に、「地域での細やかな見守り」の必要性を痛感したという。

現在、「孤独死」について明確な定義はなく、「自宅などで死亡し、一人暮らしなどの理由から発見が遅れた場合」を概して「孤独死」と呼んでいる。起こった 3 件のうち、2 件は家族や地域が安否を気にかけていた事例であり、発見が遅れたという事実はあるものの、本人が当時「孤独」のまま死亡したか否かは本人にしか分からない。しかし、自分たちが暮らす地域で起きた事件報道に、自治会をはじめ地域住民は大きな危機感を募らせた。

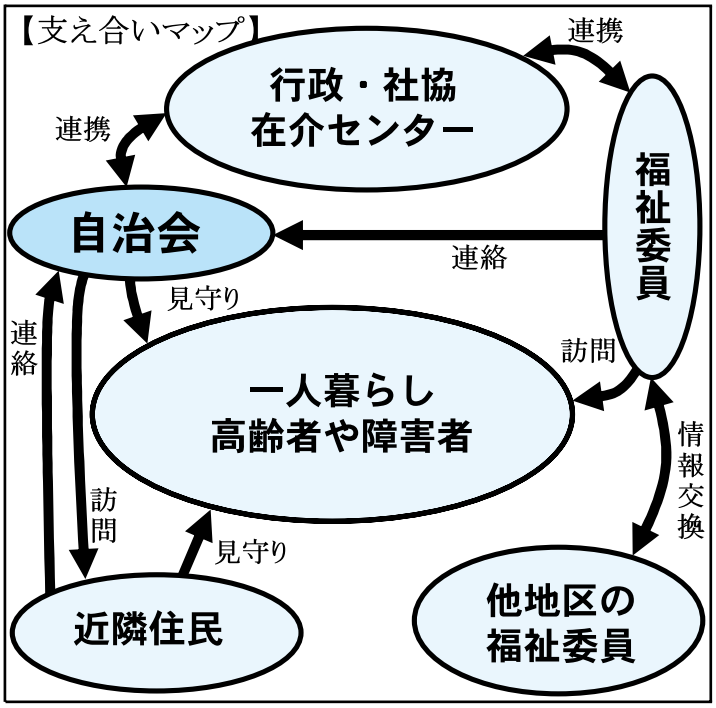
そこで、自治会では「より具体的な実践が必要だ」と感じ、「一人暮らし高齢者マップづくり」などを提案。住民の協力を受けて活動がスタートした。

地道に進められた活動であったが、一人暮らしの身体障害をもつ住民を訪問時に、体調の急変を察知して病院へ連絡し、大事に至らずに済んだ事例もあり、成果を挙げてきている。また、自治会には健康や生活に関する相談の連絡が届けられるようになり、その声に丁寧に対応することによって、住民との絆や信頼感が高まっている。

地域に生まれた二重三重の見守り体制

この活動によって、地域には二重三重の見守り・連絡体制が作り上げられている。

まずは、近隣住民による見守り。次に担当地区の福祉連絡協議会委員による見守り。さらに、自治会や市社協、在介センターの職員らによる見守り。自分たち身近な場所に一人で暮らしている高齢者や障害者がいることを認識し、必要な情報は共有し、住民同士のコミュニケーションを大切にすることで、地域における日常的な見守りの体制へと発展させている。



信頼関係を築くコミュニケーションが大切

自治会に加入していない転居者が多くなる中で、地域内の状況を把握するためには住民同士のコミュニケーションが大切となる。

見守りの必要性と活動の趣旨を丁寧に説明して、住民との信頼関係を築かなければ、見守り活動は成功しない。福祉委員を務める屋嘉比シゲさんは見守りの際の留意点について「住民と接する時には言葉遣いに気をつけて、こちらから心を開いて接するようにしています。」と話した。

▲月例の連絡会では在介センター職員、社協職員、福祉委員、自治会長らで意見を交わす。

「個人情報保護」と「情報共有」の両立が課題

友愛訪問活動等においては、高齢者や障害者の住所や氏名などを把握する必要があるが、個人情報保護により行政などからこうした情報の提供を受けることができない。

城前自治会では独自の調査活動によって情報を収集し、そこで得た情報は、役員や福祉連絡協議会の委員が必要最低限の情報だけを共有することとしている。「個人情報保護」と「情報の共有」の両立は今後、地域福祉活動全般における共通の課題と言えるだろう。

『大きなお節介』が住民に受け入れてもらえる秘訣

住民との対話を大切に日ごろから地域を巡回している内間会長は、「ここまでやるかという『大きなお節介』こそが、住民に受け入れてもらえる秘訣。」と話す。住民からの訴えを待つのではなく、「何か困ったことはありませんか？」と聞き出すことで、住民のニーズを把握とその対応に結び付けている。こうした一連の過程が住民に「地域の一員」としての自覚と安心感を与えている。

さらに、内間会長は「住民の皆さんはもちろんですが、社協や在宅介護支援センター、市役所などの関係機関とも連携を密にして、地域の課題に対応していきたい」と話す。この公民館では今年から子育てサロンも開設された。住民が安心して暮らせるよう、足元からの地域づくりが進められている。

事例6

僕ら小さなクリーン隊！
愛の泉保育園・愛の泉クリーン隊（沖縄市高原）

沖縄市高原地区は、近年宅地整備が進み、人口が増加している地域である。

同地区にある愛の泉保育園（金城キヨ子園長）は、園内外の緑化活動を積極的に行っている保育園の一つ。そして緑化活動以外にも、園児たちを中心に「愛の泉クリーン隊」を結成し、地域を巻き込んだ美化活動に取り組んでいる。ここでは、保育園児らが取り組んだ地域活動の好事例を紹介する。

小さな手にゴミ袋を携えて～大勢のボランティアが参加

愛の泉保育園では「花を通じて優しい心を育てたい」というテーマを掲げ、園内外の花いっぱい活動に取り組んでいる。園庭は季節の花々で彩られ、訪れる者の心を癒している。

この保育園では緑化活動のほかにも、園児たちを中心に「愛の泉クリーン隊」を結成し、保育園周辺で空き缶やゴミを拾う清掃活動に積極的に取り組んでいる。

▲ゴミ袋を手に一生懸命ゴミを探す園児たち

清掃活動は年５～６回、土曜日の 10 時～ 11 時の時間帯に行われる。参加者を幅広く募るため、近隣住民にもチラシを配布して参加を呼びかけている。そのため、クリーン隊には保育園の園児や保護者、卒園児童、その他地域住民のボランティアが集まり、多い時で総勢 100 名が活動に参加する。

清掃活動を行うのは、園周辺の公園や道路などが中心で、園児たちは小さな手にゴミ袋を携え、約１時間かけて空き缶などのゴミ拾いを行う。

清掃活動は屋内で行われるだけに、道路交通や参加者の体調管理には特に気を使っている。地域へのＰＲ効果と子どもたちの安全を考えて、腕章、のぼり（旗）、軍手といった備品を用意し、列を組んで清掃に当たっている。なお、こうした備品等については園の特別保育事業の予算でまかなっており、継続的な活動のための大きな財源となっている。

また、昨年からはアルミ缶などの資源ゴミをリサイクル業者に引き渡し、貯まった収益金を市内の動物園（沖縄こどもの国）へ寄付するなどの活動も行っている。

きっかけは「まちをキレイにしよう」

活動を始めたのは、10 年ほど前。金城園長が職務会に「まちをキレイにしよう」と提案したのがきっかけ。その後、子どもたちや保護者と検討を重ねながら、活動をスタートさせた。

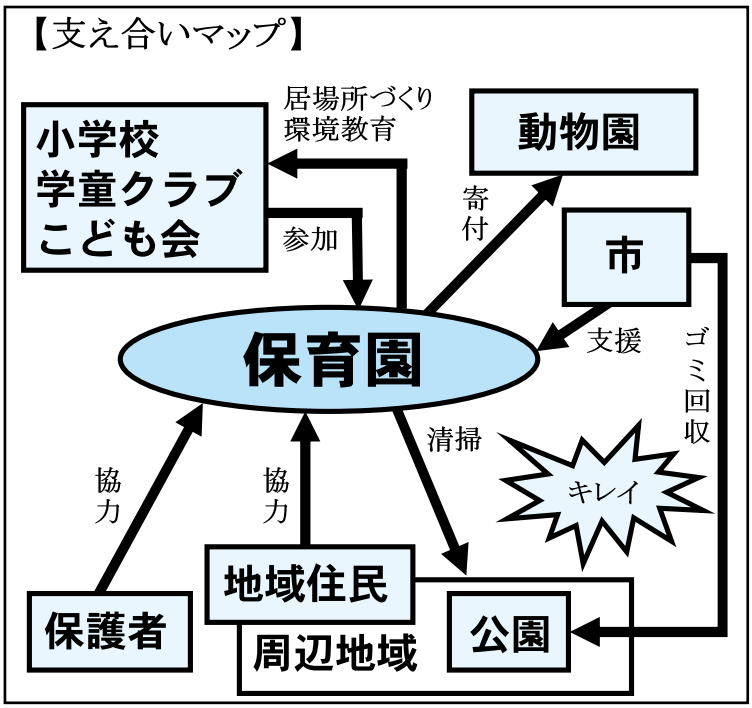
その後、地域の協力を得ながら活動は継続し、現在に至っている。「クリーン隊」の活動日以外の園外保育活動の際にもゴミ拾いを行うなど、花いっぱい運動も含め、環境美化に努める保育園の活動はすっかり地域に定着している。

▲一年中、季節の花々が咲き誇る園庭は園児の自慢、地域の宝となっている。

地域とのつながりを大切にしているからこそ、協力も生まれる

愛の泉保育園は沖縄市子ども会育成連絡会に加盟し、地域の行事などに積極的に参加・協力している。

こうした地域とのつながりをもとに、クリーン隊の活動にも多くの関係機関や地域住民が関わっている。



例えば、市の環境課ではゴミ袋の無償提供やゴミ回収の支援を行っている。活動を始めた当初は、集めたゴミを一旦園に持ち帰って回収に出さなくてはならなかったが、現在では活動場所の公園へ回収車を手配できるようになった。

園の周辺には学童クラブや小学校があり、子どもたちや住民が集まりやすい環境となっている。こうした立地条件も手伝って、愛の泉保育園では日常的な地域連携が可能となっている。

親子で参加できるボランティア活動の機会として

先述したとおり、クリーン隊の活動には園児だけでなく、保護者や地域住民など多くのボランティアが参加する。

清掃活動に参加した園児の保護者からは「子どもと一緒に、社会のために良いことができるなら」と賛同の声が寄せられている。

▲大勢のボランティアが力をひとつに。環境への意識も高まっている。

また、周辺の地域住民からは「まちがキレイになった」と感謝の声が届けられている。

清掃活動に参加したり、清掃する子どもたちの姿を見た保護者や周りの大人たちも環境に対する意識が高まるなど波及効果も生まれている。

不法投棄の問題も

クリーン隊の美化活動を行う中で、子どもたちは色んなゴミを見つけてくる。「われ先に」と空き缶やゴミを拾う姿は微笑ましい。しかし、子どもたちが色んなゴミを見つけてくる中で、粗大ゴミを引っぱりだすこともしばしば。活動については周りの支援のおかげで概ね順調に継続できているとのことだが、こうした不法投棄については「地域が抱える課題」として、解決に向けたさらなる連携が求められる。

活動内容を充実させ、地域のお手本に

クリーン隊では毎年、市が主催する「目抜き通り清掃」という地域活動にも参加している。「地域活動の一環としてこれからも活動を継続していきたい」と金城園長は話す。また、子どもたちの活動の様子を記録することにも手間を惜しまない。「活動回数を増やすのではなく、活動の内容を充実させていきたい。これから、他の地域での活動のお手本になれば。」と今後の展望を語ってくれた。

地域活動はアイデア次第で子どもからお年寄りまで誰でも参加することができる。この事例は他の地域においても大いに参考になる実践事例であろう。

気づきを築く、福祉の目と芽（2）
～清掃ボランティア活動をはじめるには～

環境美化や自然保全、高齢者や障がい者の自立生活支援を目的に行われる清掃ボランティア活動は次のことに留意しながら準備を進めましょう。

【企画を立てるにあたって】

まず、「どのような活動にしたいのか」、「どれぐらいの達成度を目指すのか」といった目標を立てます。目標をしっかり立てることで、後の企画が立てやすくなるだけでなく、協力依頼を行う際の趣旨説明がしやすくなります。 そして、事前に十分な下見を行い、「どれぐらいの人数と時間が必要なのか」を検討します。気候や気温、時間帯の設定は無理のないプランを心がけましょう。環境美化を目的に行われる清掃活動では道路や海岸、公園などが活動場所として想定されますが、そこを管理する行政機関等にも連絡し、「清掃活動を行うことが可能かどうか。（必要かどうか）」を確認します。また、福祉活動に関連する清掃ボランティアでは一人暮らし高齢者宅などが活動場所に想定されますが、住人はもちろん近隣住民にも事前に連絡を入れておきましょう。

【活動上の留意点】

必ず活動責任者を置き、責任者の指示に従って、安全に留意しながら活動を行います。動きやすい服装で参加し、熱射病や水分補給、虫刺されなどにも注意を払いましょう。救急箱の用意や緊急時の連絡体制も確認しておきます。また、万が一に備えて「ボランティア活動保険」等にも加入します。

【活動における工夫】

活動ではゴミを拾うことではなく、ゴミを拾わなくても済むような環境づくりこそが重要な目的となります。そこで、地域内外へのPR活動の手段としてポイ捨て防止を呼びかける看板等の設置等が考えられますが、地域全体が環境美化に対する意識を高めるよう工夫することが大切となります。行政や学校、自治会、ＰＴＡ、社協、福祉施設、企業、ＮＰＯなど多方面から協力者を募り、連携・協働によって活動を進めると効果が上がるでしょう。

【記録を残す】

清掃活動では記録を残すことも重要となります。「活動前後でどれだけキレイなったのか」、「どのようなゴミがあったのか」など写真なども交えて細かく記録しましょう。こうした記録は次回の活動の参考になるだけでなく、環境保全の理解を深める資料としても活用できます。「企画→活動実践→振り返り」を繰り返すことで、継続的で効果的な活動になるでしょう。